20110205　人間工学会研究会2

（北村）　宮城学院女子大の大橋先生から指名コメンテーターとしてのお話をいただきたいと思っております。なぜこれをお願いしたかという、たくらみを行ったのかというのがありますので、ちょっとだけ背景をご紹介しておきたいと思います。

　今、レジリエンスという話を聞いていただいて、それぞれの方がそれぞれの立場からお感じになったことがあるだろうと思うんですけど、特にヒーローたちの物語がたくさん出てくるわけですが、ヒューマンファクターの研究、あるいは人間安全工学の研究というのは長いこと、エラーとの戦いという形で定義されてきたと思います。

　つまり、間違いをする人間がどうやったら間違いをしなくなるか。それを訓練で補ったり、マシンインターフェースで補ったり、道具のデザインで補ったり、いろいろなことをやったわけですね。それは別に私は間違いだったとは思っていないです。それはそれでいいと思います。それだけでは片手落ちだったんじゃないかなという感じがずっとしていました。

　なぜかというと、私は原子力の業界で仕事をしていますけど、もっと安全、もっと安全という研究をずっとやっていますと、何かだんだん暗くなってくるんですね。やってもやっても終わらない。それでも事故とかトラブルとか不祥事というのは必ず、頻度は下がるかもしれないけど、起こるんですよね。これでもだめかということをやっていますと、何かだめづくしで、こんなことをやってどうなるだろうという思いがありました。でも、それは違うとも思っていたんです。何かそんなはずはない。人間のやっている営みというのはそんなにマイナスの方だけから眺められるものじゃないと、ずっと思っていました。

　そういう中で、このジェームズ・リーズンの本と、それからさっきちょっと言ったエリック・ホルナゲルは佐相さんにもご紹介いただきましたけど、そういうものを見ている中で、やっとマイナスだけじゃない、プラスに着目するヒューマンファクター研究、人間工学研究というのが出てきたかなという思いがしております。

　だから、安全が大事だから事故に着目する、安全が大事だからエラーに着目するというのは、別に全然否定することではないです。研究としてはそれはいいです。でも、プラスの面にもやっぱりもっともっと注意と関心を払うべきじゃないだろうかということが1つですね。

　特に研究成果を人間の実社会に応用する場合には、マイナスだけを見て応用したのでは非常に片手落ちになるんじゃないかなということを思っております。だから今日、いろいろな現場をご経験の方がいろいろ来ていらっしゃいますけど、この後はぜひ、そういう観点からもご意見をいただきたいんですが。

　今、どっちかというと組織に寄ったレジリエンス、あるいは人間のヒーロー性とかポジティブ性に関するご紹介があったと思うんですけど、人間のポジティブといったら、このポジティブサイコロジーというのはだいぶ前から見ていて、そういうのはあるよなと思ったんです。でも、ここに心理の先生方もいらっしゃっていますけど、私は心理の全然門外漢なんですが、そういう私が調べても、ポジティブサイコロジーというのは時に危ない話題みたいな形で、例えばインターネットの世界の記事なんかを見ていると、とらえられています。

　なぜかというと、似たような名前でポジティブシンキングというのも別に悪いことじゃないですね。ポジティブ心理学というのも悪いことではないですけど、こういうことを考えると幸せになるよとか、こういうことをやると病気が治るよとか、ちょっとそんな感じのポジティブもよくあるんですよ。

　ただし、この後、ご紹介いただくポジティブサイコロジーというのは、本来そういう何かあやしげなものじゃ決してなくて、米国の心理学会の会長を務めたマーティン・セリグマンという人が提唱している筋の大変通った考え方だと私は思っております。

　大橋先生にお願いして、それをぜひ紹介してくださいということで、ご紹介いただくと、先ほどのレジリエンスと、それからこのポジティブサイコロジーが基本において、きっとつながっているということをご理解いただけるんじゃないかなと思います。これを受けて次の討論がさらに展開できればいいと思っていますので、どうぞ、大橋先生、個人的なご感想も入れながら、存分にご紹介いただきたいと思います。

（大橋）　ご紹介いただきまして、ありがとうございます。宮城学院女子大学の大橋と申します。30分ほどお時間をいただきまして、今、お話のありましたポジティブサイコロジーという観点から安全というものをどのように考えていったらいいか、そのようなお話をさせていただきたいと思っております。

　最初に、ちょっと小さいんですけれども、別に大したことを書いてありませんので。そもそも心理学というものはどういう学問なのかということを、たぶんここにいらっしゃる方は、ほとんどの方は技術系の方だったりされると思いますので、簡単にご紹介しておきたいと思います。

　日本心理学会という学会が日本の心理学会の中では最も領域の広い学会としてありますが、その領域の広い学会の中に発表をしますと、あなたはどの領域で発表しますかというふうに言われます。その領域が今、ここに書いてあるたくさん領域ですね。原理、方法、人格、社会、文化、臨床、障害から始まって、ずっと最後ジェンダー、フェミニズム、環境というふうに、いくつあるか数えたくもなくなるぐらい、たくさんの領域があります。

　これが今の心理学というものを1つ表しているものだと思います。資料はございませんけれども、今日朝、やっと出来上がったものですから、すみません、資料を印刷できなかったんですが、後で例えばメール、あるいは東北支部のホームページからもダウンロードできるようにしていただけると思いますので、今、お見せするものはすべてお手元にお届けできるというふうにお考えください。

　これらたくさんあるものを私なりにいくつかに分類をしてみますと、まず1つはある特定のメカニズムというものを研究の対象とするという分野があります。非常に伝統的な心理学ですね。生理的なメカニズム、あるいは感覚、知覚、認知と呼ばれるような情報を獲得するメカニズム、処理するメカニズムです。あるいは学習、記憶、言語、思考、情動、動機付け。情動、動機付けなんていうのは今回のポジティブサイコロジーとも少し関係してくる部分ですけれども、情動というのは感情ですね。心理学では情動と呼ぶことが多いです。

　まずあるメカニズムを対象としている。それから、ある特定の現象が対象となるようなもの。さらには、ある特定の研究フィールドが対象として挙がってくるもの。あるいは、ある特定の状態が対象となるようなもの。あるいは方法論を対象とするようなもの。こんなように分かれるのではないかなというふうに、ここにあるすべてがここに入っております。若干、最近出てきたジェンダー、フェミニズムとか、環境とかというものが実際どんな研究を扱っているのか私自身も不勉強なものですから、いったいどこに入るのか一番悩んだんですけれども、おそらくこの辺に入るのではないか。

　実は心理学というものは何々心理学という名前はたくさん付いておりますけれども、何々心理学というものが、すべてある何かの1つの基準によって名前が付いているというわけではなくて、メカニズムだったり現象だったり、あるいはフィールドだったり、あるいは状態だったり、こういうふうに何々心理学、○○心理学の○○の根拠となるものにはあるんですよということをざっとご覧いただければと思います。ちなみに、この中にポジティブサイコロジーというものは現時点では入っていません。これも後で出てくる重要なことになると思います。

　これらすべての領域に共通する心理学の方法論というか、物の考え方というものは、私はこうだろうというふうに考えています。ただ、これについてはここに今、心理学の専門の先生方も何人も、先輩、大先輩を含めておられますが、あくまで私が個人的に考えているものだとお考えください。

　実は日本心理学会は「心理学とは」なんていうことをホームページの中で、見出しだけ作ってあります。しかし中身は現在作成中ですというふうに、だいぶ長い間なっていて、おそらくこの先、何年も作成中のままなのではないかと思われます。つまり、そこに端的に書けて、そこにそういうことに携わっている人が一気に合意できるようなシンプルな書き方というのは、おそらくできないんじゃないかと思うからです。そういう意味で、これもあくまで私の考えであるとお考えください。

　まず大前提として、世の中には見えるもの、見えないものがある。心なんていうのはまさに見えないものの最たるものだということですよね。UFOでも幽霊でもツチノコでも何でも目撃談とか写真とかがありますけれども、いまだかつて心の写真とか心の目撃例というのはないわけですよね。それほど心というものは徹底的に存在がないものだと私は思います。

　しかし、心というものはそれだけ徹底的に存在がないんですが、大前提として心と行動は密接な関係があり、心は行動に表れる。例えば顔は心の窓とか、目は口ほどにものを言うとか、そのような言葉、あるいは逆の意味を示す言葉としてはポーカーフェースなんていう言葉があります。つまり、心と行動、外面というのはかなり程度密接にリンクしているんだという、まずこの前提があります。

　心理学という学問をこの世から消すのは簡単です。この大前提を誰かが壊してくだされば、その瞬間に心理学は研究するすべを失うと私は思っています。なぜかというと、心理学のやっていることは行動、その心と密接に関係して表に表れてくる行動を測定し、その測定した結果に基づいて心を推測したり、あるいは測定した結果から心を解釈したり、このような方法論を採るのが心理学なのではないかというふうに、私は考えています。これは例えば臨床心理学と呼ばれるようなものから発達とか、ありとあらゆる心理学に私はこの図ですべての心理学が説明できると思いますけれども、これに同意が得られるかどうかは難しいかもしれません。

　その上でもう1つ、心理学について歴史をちょっと振り返ってみたいと思います。心理学という学問はおそらくほかになかなか類例がないと思うんですけれども、設立した年が分かっています。あるいはもっと細かく調べれば日付までたぶん分かると思います。何月何日までですね。

　というのは、1879年なんですが、ライプチヒ大学に世界初の心理学実験室が開設された。このときをもって近代心理学というふうに呼ばれることが多いんですけれども、その前に古代心理学とか、そういうものがあるかというと、ないんですけれども、今の心理学というものがこのときをもって成立されたと考える心理学者はたぶんかなり多いと思います。それが1879年、今から132年ぐらい前の話です。

　当時の研究法というのはほとんど、このブントという人がライプチヒ大学で心理学実験室を開設したんですが、そこに世界中の心に関心を持つ人たちが集まりました。そこで何をやっていたかというと、内観法と呼ばれる、これは非常に矛盾を感じられるかもしれませんが、主観的体験を客観的に記述する方法について一生懸命訓練がされていたと。そのように伝えられています。

　例えばどういうことかと言いますと、今、皆さんがご覧になっているこのスクリーンの色はいったい何色なのでしょうかということです。もちろん単純に白と言ってしまえば白ですが、若干何か青みがかったというか、紫色というかとか、何か真っ白ではない、そしてさらにそこに細かい格子があるような、ないようなふうに見えるといった具合に、今、自分が見ているもの、聞いているもの、あるいは触っているものの感覚、体験というものをいかに客観的に記述するかということに、当時はそれしか方法がなかったわけですよね。そういう方法で意識のようなもの、つまり自分の中の内的なものをいかに客観的に外に出すか、そういうようなことに重点が置かれていたと理解しています。

　それが1913年に大きく変わります。ワトソンという人が出てきました。この人は実はこのとき35歳です。この2年後にアメリカ心理学会の会長になっていますから、37歳でAPAの会長になるという。私は40歳ですけれども、そのワトソンよりも3つも上ですけれども、長と呼ぶものは1つも付いておりません。ちょっと余談ですが、アメリカのすごさというのは37歳の人を会長する、そういう懐の深さなのかなと思ったりもちょっとします。

　ワトソンが何を主張したか。ちょっとこういうやり方をやっていたんじゃ、いかんでしょう。自然科学に追い付くためにはそんなやり方ではなくて、直接観察可能な行動のみを科学的測定に基づいて学習など、とにかく客観的観察できるようなテーマに限定して研究をしましょうということを提案したんだと思います。後で間違っていたら訂正していただける方がたくさんいらっしゃいますのでお願いします。

　刺激と反応の対応関係の解明を何とかしてやろうということに終始していたのではないかと思います。もちろん後期になってくると、単純に心的過程をブラックスボックスと見なすわけではなくて、S-O-Rなんていうふうに間にOを挟んでみたりとか、いろいろなことはやっているわけですが、いずれにしてもこの客観的な観察可能なことを相手にするということは、この時代の一番の主流でした。

　1960年代から70年代にかけて認知革命というものの影響が出てきます。科学的な測定は残しつつ、過度に対象が狭められていた心理学の研究というものを拡張しようという動きです。あるいは拡張しなければ、拡張することを外部から求められている、そのような時代で、いわば外圧によって心理学の中に変革が起こった、そのように言えるんだと思います。

　私が考える限り心理学というものは、設立から2回の大きな変革を経て現在に至っているのではないか。従って現在、心理学というものはテーマは心にかかわることなんですけれども、それをとにかく客観的に科学的に扱おうと、こういうアプローチを取っている、そういう学問なんですよというふうにお話ししておきたいと思います。

　では、ポジティブサイコロジーとはどんな学問なのか。先ほどいくつか並べました。心理学の今の領域を分けていくと、いくつかに分かれますよということで分けましたが、ところがそのどこにもはまりません。特定のメカニズムを対象とするわけでもなく、特定の現象が対象なわけでもありません。特定のフィールドが対象となるわけでもないですし、特定の状態が対象というわけでもないです。あるいは方法論というわけでも、もちろんありません。

　では、何なのかと言いますと、先ほども北村先生からお話がありましたように、かつてワトソンが会長を務めたAPA（アメリカ心理学会）の会長に就任されたセリグマンという人が就任後初のAPAの総会、会長講演の中で20世紀の心理学の2つの課題と挙げた2つのうちの2番目が、今日のポジティブサイコロジーにつながっている、そういうふうなものです。2つのうちの1つ目は民族紛争の解決とセリグマンは挙げています。それからもう1つが、すべての人々の人生をより充実した実りあるものにすること、こういうふうにセリグマンは言っています。この2つ目がポジティブサイコロジーにつながっていくわけです。

　ポジティブサイコロジーについてちゃんとした本が今、日本で例えば出ているものとしては、島井先生という方が書かれた『ポジティブ心理学』という本だと思いますが、この島井先生の解説によりますと、ポジティブ心理学は心理学における新たな研究テーマや研究領域というよりも、ポジティブ心理学運動と呼ぶのがふさわしいような、心理学全体にかかわる学問的な運動であると。ムーブメントだと。セリグマン自身もムーブメントという言葉を使っていますが、そういう位置付けだとお考えいただければと思います。私もこのようなものだと理解しています。

　セリグマンはこの会長講話、講演の中で、このように述べています。20世紀後半の心理学はどういうものかということで、人々が劣悪な条件下において、どのようにすれば生き延び耐え得るかについての多くのことを理解してきましたが、普通の人たちがよりよい条件の下で、どのようにしてますます元気になるかについては、ほとんど何も明らかにしてこなかった。

　これは第2次世界大戦後に心理学が治療に関する科学、この本の中に訳があるんですけれど、この訳ではヒーリング、癒しに関する科学と訳しているんですが、癒しというよりは私は治療なのではないかと。原語は「a science ◇larger◇ about healing」というふうにセリグマンと書いているんですが、私は治療に関する科学というふうに訳したいと思いますけれども、治療に関する科学になってしまったことによる。

　そこでは疾病モデルに基づいて障害を回復することに精力を集中してきた。これが戦後の心理学の在り方だったのではないかとセリグマンは言います。そして、ほとんど排他的にそのような病理的なものに注意を集中させて、元気にあふれた個人や繁栄するコミュニティーに目を留めることがなかった。

　何で北村先生がここでポジティブサイコロジーの話を私にするようにとおっしゃったかが少しずつ分かってきていただけるかと思いますが、今、心理学の話をしていますけれども、心理学という部分を人間工学、あるいは安全工学、あるいは現場の安全という言葉に置き換えると、まったく同じ様相がこの中にあるということが分かっていただけるのではないでしょうか。

　もちろん障害を評価し、それを治療することによって力を注ぐことは重要であったし、またそれは重要な成果も上げてきました。しかし、そのような成果は大きな犠牲の上にもたらされたものである。そして、私たちが単なる治療の専門家になるとしたら、そのときは私たちはより大きな使命を忘れたことになる。その使命とは人々の人生をよりよいものにするということである。このようにセリグマンは述べています。これが彼のビジョンなわけですね。

　決して過去を否定するわけではない。ポジティブ心理学に対応すればネガティブ心理学というようなもの、過去に扱われてきたものが間違っているわけではないけれども、あまりにもそれ一辺倒でいくということは、そもそも心理学が社会から委ねられている使命である、より人々の人生を豊かにすること、よりよいものにすることに対して少し片手落ちなのではないかというのが、セリグマンの主張です。これは安全工学や人間工学、現場の安全にかかわる先ほどの北村先生の話とも一致するところだと思います。

　そして、どうしたらいいかということで、予防の心理学へということを言います。精神疾患の悲劇を予防することが、実は人間の強さを理解し育成することを目指す新しい社会、行動科学に自分は注目したと。どんな薬物治療や、どんな心理療法も精神的な病気に対して、この人間の強さほどは自分を守るものとして十分に機能しないと考えているからであると言います。これを事故に置き換えていただくと分かると思います。

　ところが、心理学は否定的なものに焦点を当ててきたために、苦痛な人生の出来事を乗り越えて成長していくための成熟、熟達、やる気、特性、そういう形成についてはほとんど何の知識も持たなかったと言うわけですね。ここでの使命とは心理学という科学と実践の方向を人間の強さに向かって方向転換するために、科学研究と奨学制度の質を高めることにある。この方針によって予防的な心理学的健康の特性や土台を明確にして、それがどのようなものかを理解し、若い人たちにそのような特性を育成する方法を知ることができるのである。そういうふうにセリグマンは述べています。これがポジティブ心理学の根幹の部分にある理念と考えていただければと思います。

　ただもちろんそれには批判も出てきます。いくつかの批判の方向性というか、批判を向ける人たちがあるわけですが、その1つとしてラザルスという人の批判をここに挙げたいと思います。ラザルスという人はストレスの研究で非常に大きな成果を心理学の中に残している専門家です。彼は、「Does the positive psychology movement have legs？」という、足が付いているのかというような論文を投稿することになります。

　その中で彼が懸念していることは大きく2つあります。実は私は原著を読んでいないので、この島井先生の本によるとというところになってしまいますが、2つあります。1つはポリアンナ症候群への懸念です。ポリアンナ症候群というのは、これもくしくも1913年に出版された小説というかお話で、ある少女がとにかく物事のいいことに、いいことに目を向けて生きていくという、日本でも『愛少女ポリアンヌ』という、かつてフジテレビのドラマをやったそうですが、私はちょっと知りませんけれども、ハイジみたいなお話です。とにかくいいところに、いいところへ焦点を当てる。

　お話としてはいいんですけれども、そんなもので生きていくと大変なことになるというのが、この心的疾患の1として症候群という名前が付いています。現実逃避の一種で楽天主義の負の側面を表すもの。直面した問題の中に含まれる微細なよい部分だけを見て自己満足し、問題の解決に至らない。あるいは常に現状よりも悪い状況を想定して、あるいは自分よりも悪い状況の人を想定して、そうなっていないことに満足し、上を見ようとする。このようなものをポリアンナ症候群と呼ぶんだそうですが、ポジティブサイコロジーという流れがこういう方向に行っては危険なのではないか、行く可能性があるのではないかということをラザルスは指摘しています。

　それからもう1つはポジティブという言葉が一人歩きすること、極度に単純化された二元論という表現を使うんですが、それへの懸念です。つまり、ネガティブかポジティブかという2つの対立軸の中だけで物が語られる、そういうことは危ないと言っていますね。これも先ほど北村先生からご指摘があった通り、実証的な裏付けのないポジティブ心理学、えせポジティブ心理学というものが台頭していくことへの懸念です。

　かつて日本の中でも心理テストのようなものが大はやりした時期がありました。テレビをつければどこでも心理テスト、心理テスト、そのようなときに我々心理学者は非常に一般の人と会話をするのがつらかったわけですけれども、場合によっては何か心理テストをやってよと言われる、そういうつらさ、あるいはあの心理テストは何でああなるのという根拠を求められても私には分からないという、そういうようなつらさがポジティブ心理学の中にも出てくることは当然懸念されるわけですよ。分かりやすいですからね。ポジティブなものを扱っていくと人間は元気になるよということは非常に分かりやすい。でも、そういうえせポジティブ心理学の台頭への懸念ですね。

　それからもう1つは、表面的にネガティブだからといって、それが常に真な意味でネガティブだとは限らないということです。ラザルスは先ほど申し上げたようにストレスの大家ですから、ストレスというものは人間の1つの防衛的な機能として非常に能動的な、ある意味ポジティブな機能を持っているわけです。

　ストレッサーにさらされたときに、それを自分の中できちんと処理する、そういう能力のことをストレス対処能力、コーピングというわけですから、非常に実はポジティブなんですね。しかし、表面的にストレスというものは非常にネガティブなイメージがある。そういう表面的なネガティブなイメージと真の意味との不一致というものが、単純化される中で忘れ去られてしまうのではないということを懸念しています。

　さらに一方のポジティブ感情だとされるものの中に、かなり内容の異なった感情がある。それらのあいまいにばくっとポジティブという1つの看板を掲げることによって、逆に分かりづらくしてしまう懸念、危険性をラザルスは指摘しています。非常にまっとうな指摘だと思います。これに対してセリグマンは答えているんですけれども、私の知る限り、あんまり答えにはなっていません。

　私流にポジティブサイコロジーを解釈しますと、若干まずネガティブに解釈します。アメリカ的だなと思うんですが、従来の研究はネガティブをやってきたんだというふうにレッテルを張って、自分のやっている方向に対する目新しさを出す一方で、ネガティブだからといって悪いわけではないといって、ネガティブのいろいろな知見をわっとポジティブ心理学の中に取り込んでいって、そういう今までの研究の再構成を自分の視点でやる。そういう意味では例えば認知革命後の心理学の変化とか、あるいはワトソンによる行動主義が出てきた、その前2者の心理学の変革とは少し趣を異にするのではないかと私は感じています。

　もう1つ、この『ポジティブ心理学』という中で島井さんが書いているんですが、宗教色の強いテンプルトン財団の支援によるAPAのポジティブ心理学賞の表彰が始まっている。その賞金は10万ドルとかなり高額であると言える。島井はこういうことを言っていますね。10万ドル、しかもテンプルトン財団というのはもちろんご存じのように、天才的な投機家といわれたテンプルトンがつくった財団ですが、かなり宗教色というふうに言っていいのかどうか分かりませんが、島井先生によると宗教色の強い集団だ。そこが10万ドルものお金を出すわけですから、そういう意味ではセリグマンの政治家としてのしたたかさというようなものがこの中に垣間見えるのではないかと私は思います。

　ただし、それがだめかというと、そんなことはもちろんありません。よさというものを善として、グッドネスとしても、どっちでもいいんですが、こういうものに目を向けるということは世界的な1つの研究の潮流とも言えます。例えば先ほどレジリエンスという言葉が出てきましたが、実は私の解釈では本家は心理学です。いじめや、もちろんストレスのような人間に対して攻撃してくる、それこそネガティブなものに対して、人間がその攻撃を受ける前の状態にきちんと回復する力、そのようなもののことをレジリエンスと呼んで、1つのパーソナリティー、性格特性の1つとして扱っているのはおそらく最初なのではないかなと思います。

　弾力性という言葉や回復力、いろいろな言葉で訳されると思いますが、私は昔、車をぶつけたことがあるんですよ。止まっている、駐車している車に、もう15年ぐらい前の話ですからもう時効だと思っています。ぐっとバックしていったら後ろにちょっと車がいて、ベコっという音がして、わっと思って前に車を出して、つまりバンパーに当たってしまって、バンパーをへこませてしまったんですよね。まずいと思って降りて見に行ったら何でもないんですよ。傷1つ付いていない。じゃあ、いいやと思ってそのまま逃げたんですけれども。これはレジリエンスです。そのバンパーは非常によい高いレジリエンスを持っていたということになるわけですね。

　大事なことは変形するんです。変形をするということがまず第1段階で必要です。形が変わらないわけではない、硬くてそのまま形が変わらないんじゃなくて、いったん変形するんです。ところがそれが元に戻る、これをレジリエンスというんですね。だから、回復力でも弾力でもいいんですけれども、日本語としては片仮名でレジリエンスと呼ばれることが多いですので、そのように使っていただければいいのではないかなと思います。実は環境学でも生態系の回復力を示すような言葉として、レジリエンスという言葉が使われているんだそうです。ですから、こういう便利な言葉というのはどんどん広がっていく、そういう傾向はあるだろうということですね。

　それからもう1つ、人もそうですし、これは後で少しお話ししますが、資金、鉱物資源等が、かつて例えば30～40年前に、そんなことはまったく考えられていなかった制約の中に我々は未来を見なければいけないというのが現実ですよね。その中では行け行けどんどんの時代に考えてきたいろいろな科学のパラダイムというものは、この時点でパラダイムシフトをしなければいけない、そういうことを求められていることの現れなのかなと私は考えています。

　しかし楽観論的科学とか、あるいは単なる良好事例分析にこのポジティブサイコロジー、あるいはポジティブ・ヒューマン・ファクターズというものを収めてはいけないと思います。その意味では今、セリグマンが提唱してから14～15年がたっていますこのポジティブサイコロジーの流れを参考にして、それの二の轍を踏まないように、あるいは後出しじゃんけんであることの利点を生かしながら、いろいろ取り込んでいくということが必要なのではないかと考えております。

　もうあと2分だけ、私がこれに関連して少し付け加えたいことを申し上げますと、産業現場の必ず訪れる近未来像というものを2つお示ししたいと思います。1つは先ほどのお話に出ておりましたマニュアル化の徹底というものが昨今ものすごく叫ばれています。もう本当に小さな工事現場まできちんとマニュアルがあって、何かあったらマニュアルを作りなさいということが言われるわけですね。

　こういう流れは先ほどご指摘があったように、ロボット化とも言うべき作業員の方々の自主性を奪うことは間違いありません。そういう自主性が奪われた中で作業をしなければいけないという現実が、もう今もすでにあると思いますし、それは近い将来、必ずもっと大きな問題として出てきます。

　それからもう1つは労働人口の減少も必ずや来るということですね。またごめんなさい、小さくて、これも大したことを書いてありません。責任追及から原因追究への流れというものはもちろん産業界の常識になるわけです。個人は悪くない、システムが悪い、組織が悪いのだと、RCAを徹底的にやって、根本原因分析を徹底的にやって、ちゃんと対策を立てなさいと。言うまでもないことですが、立てた対策はちゃんと守ってもらいますよと。万が一、守られなかったとしたら、守られるようにならなかった原因を考えなさいというふうに、どんどん原因と対策が膨大に広がっていくわけですよ。

　一方で、もちろんこれはすべてマニュアルですから、あなたたちは余計なことをしてくれるな、ここに書いてある通りにやればいいんだ、こういう教育が最近では多くなってきています。これは振れ過ぎた振り子、リーズンの言葉で言えばそういうことになるでしょう。

　個人の工夫や努力の余地は基本的にない。そんなことをやってくれるな。ルールさえ守ってくれればいいということになるわけですね。このような状況で自分の仕事に対するやる気というものを生み出すのは、どんな動機付けモデルを持ってしても不可能だと言わざるを得ません。そのことは当然モラル、士気の低下を招けば、当然安全性の低下につながる。つまり、ロボット化というのは安全性の低下につながる懸念、危険性を十分に持っているということです。

　それからもう1つです。労働人口は当然下がっている。これは厚労省の試算ですが、労働市場の参加者が、まず少子化の流れが変えられなかった場合の2050年は、現在の3分の2の労働力で賄っていかなければいけない。例えばあるプラントを1,000人で運転、運営しているんだとしたら、それが600人ぐらいでやらなければいけなくなるという、そういうことになるわけです。特に若年層の労働者人口は減少の一途をたどるわけですね。ですから、いかに若年層を取り込みつつ、高年齢層を引き留めるかということがキーになるのではないかというふうに考えます。いろいろなことをいろいろ書いていますけれども、とにかく労働人口は減少するという未来に対しても手を打たなければいけない。そういう中でポジティブというものは必要なんだということを最後に申し上げたいと思います。

　ただし、リーズンも自分で書いていましたけれども、ヒーローに注目することは、私はあんまりいいことではないと思います。これかなぜかというと、原因に近い当事者を後知恵で責めるのと、結果としてヒーロー的な活躍をした人を褒めたたえるのとは同じ仕組みだからです。ポジティブかネガティブの方向性の違いだけであって、両方とも後知恵であるということは変わりないんですよ。結果うまくいったというだけです。

　歩道橋から飛び降りた女の人をひきそうになったバスの運転手さんが、2次災害を防ぐためにバスを止めて、倒れている女性にほかの車が突っ込まないようした。これはいいんですよ。ところが、いつまでたっても救急車が来ない。そんなものだから、そのバスの運転手さんは乗客の力を借りて、その女性をバスに乗せ、すぐそばにある救急病院に運んだ。美談として新聞に載って、テレビで取り上げられました。

　果たしてこれはヒーローなのか。結果論的にヒーローですけれども、もしその結果として、その女性が動かさなければ助かったものが動かしたために死んでしまったら、彼はヒーローには絶対なり得なかったし、あるいは血がたくさん出ていたものによって乗客の誰かが感染症にかかったら、それはまたヒーローにはなり得なかったわけです。結果論的なヒーローの扱いというのは、私は必ずしもいいとは思いません。

　じゃあ、どんなポジティブが必要か。共通する要因としてリーズンが挙げていた最終的にはうまくいくさということの実証的、あるいは実践的な検証というものは1つのポジティブな方向としていいのではないかと思います。まず1つ本当にうまくいくさと思っていたらうまくいくのかということをきちっと確認しなければいけません。いまくいくさと思ってやっている場合と、そうじゃない場合とで、うまくいく相関が高いかどうかというようなことです。

　一方で、それがなぜうまくいったのかということを確認しなければいけないでしょう。そして、それが本当に実験室的なものではなくて、現場の実際の運営の中でもうまくいくのかどうか。そして、うまくいくんだとしたら、それをどうやったらうまくいかせるような人を増やせるのかという教育プログラムに関するようなこと、こういうような方向へのポジティブというものは必要だと思います。このことは先ほど北村先生もおっしゃった、ネガティブを扱うことの何か暗い感じというものを払拭するというような力にもなっていくんだと思います。

　このポジティブ・ベースド・アプローチというのは、おそらく人に注目しましょうという、人を大切にしましょう、そういうような方向をすごくざくっと言ってしまえば、ばくっと言ってしまえば、こういう方向なのではないかなというふうに、最後一言、まとめにもなっていませんが、まとめさせていただきまして、私のお話にさせていただきます。すみません、4分オーバーしました。どうもご清聴、ありがとうございました。（拍手）

（北村）　ありがとうございました。今の大橋先生のお話は、そういう意味じゃ、私も多少強引にお願いしたポジティブサイコロジーについての解説を、頑張って佐相さんのジェームズ・リーズンの紹介につなげていただいた内容になっているかなと思います。

　これから討論に入りますけど、もうお2人がおっしゃっていることではあるんですが、現場ということを考えたときに、どういうことをさらに考えたいかということで、ちょっとだけ討論の入り口の話をさせていただきたいと思います。

　今の『組織事故とレジリエンス』という話を人間安全工学への示唆として、もう1回見直します。もうこれはおっしゃっていることはたくさんかぶっているので、頭の整理として聞いていただければいいので、別に新しいことを話はしません。ただやっぱり現場というものにつながるとき、どう考え方をしたらいいかということを少し触れておきたいと思います。

　ちなみに、この原稿を作ったときは僕は大橋先生と打ち合わせなんかをしているときで、関係あるよと言っただけで、佐相さんが紹介してくださるリーズンの本と、それから最近いわれているポジティブサイコロジーは関係あると私は思うから紹介してねと言っただけで、中身は打ち合わせをしていませんが、結構実は同じようなことになっていますね。

　これはリーズンの言ったことの再整理なので、別に復習です。人間は事故を引き起こす一方で、信じられないような危機から驚異的な脱出劇をやってのけると。これはヒーローにかなり焦点が当たっているということを確認しておきたいと思います。この重要性については異論はないし、ただ私自身はこれで十分かということはちょっと考えておいた方がいいなと思います。

　人間安全工学、あるいは人間工学における新しい展開の現代的な意味なんですけど、リーズンによる『組織事故とレジリエンス』と直接にかかわるホルナゲルらのレジリエンスエンジニアリングの提唱は、ヒューマンファクターを考える上で重要な新しい視点だと、これも思います。そこでは人間の優れた能力とその活用方策、すなわち正の側面への関心が示されていると思います。

　であれば、私はヒーローではない、言うなれば無名の戦士たちの偉大な役割にもちゃんと光を当てるべきじゃないかと思います。これはたぶんリーズンもちゃんとそういうふうには言っていないと思うんですよ。人間工学、安全工学の研究者はもっとその方向にも研究領域を拡大すべきじゃないかと思うし、現場をお持ちの皆さんはそういうことに関してもぜひ、現場の持っているストレスやニーズというものを研究者に伝えていただきたいと思うんです。

　もう少し詳しく言います。今日繰り返して出てきたように、人間安全工学に関する個別の研究活動は人間の行動の負の側面に焦点を絞る形で成される。そういう場合があるのは当然です。そして、そのような努力が大きな成果を生んできたことも全然否定しません。だから、否定だとは思わないでください。ただし、その研究成果を現実世界の個人や組織に適用する際に、私は十分な注意が必要だろうと思います。研究と現実をつなぐときに、負の側面への注意だけが強調されると、その組織に偏った影響を引き起こす、バイアスを引き起こす可能性があると思います。

　これはしょうもない例えなんですけど、サッカーチームAの監督が選手たちにミスキックをするなとか、シュートを外すなとか、相手の選手に抜かれるななんていう注意ばかりしていたとしますね。一方、チームBの監督はさっきのパスは素晴らしかったぞとか、しっかりした密着マークができてきてよかったなとか、あきらめずに走り続けたな、アトム君は偉いなとか、肯定や称賛のコメントをいっぱいしたとしますね。注意もするけど、こういうことも言ったとしたら、どちらのチームが成長し、高いパフォーマンスを実現するか、答えは明らかじゃないでしょうかね。

　現在の人間安全工学で多いのはどっちかというと、サッカーチームAの監督みたいなことになっているんじゃないかというのが、現実に応用するときの留意点なわけですよ。さらに人間安全工学が対象とする現実は複雑大規模なシステムである場合が多いと思います。今日おいでになっている方々が従事してらっしゃる産業分野も非常にそういう性質が強いと思います。そこでは1人のヒーローも大事かもしれないけど、それ以上に与えられたミッションを真摯に遂行し続ける無名の戦士たちの役割が大きいんじゃないかと思います。

　産業事故の事例を分析すると、無名の作業者が心ならずもトラブルに巻き込まれたシナリオというのは多く目にします。そして、事故に結果的にならなかったシナリオでは、その無名の作業者がヒーローの名に値する動きをした例も知られています。私もそういうものをいくつも調べて、知識としては持っています。

　でも、それはやっぱり無名がヒーローになった話なんですよね。事故のシナリオがスタートしてからの話なんですよ。でも、もっと大事なのは、それだけでいいんでしょうかと。我々はそのような素晴らしいヒーローにだけに目を向けているだけじゃなくて、やはり日々の安全の維持に貢献している無名の戦士たちの役割というのは、本来もっともっと重要視されるべきじゃないかなと思うんです。

　だって、それがつくっている、それが支えている。それに何かのシステム的、機械的、個人的な破綻が生じたときに、事故のシナリオが始まるけれども、それもまた抑止する。さっきのレジリエンスの定義じゃないけど、始めないように、始まったら悪化しないように、悪化したら緩和するように努力はされるわけですが、それを起こさないのは一番よくて、たぶんリーズンが言っていることで一番、私の勝手な観点から大事なのは、人間が微小に調整しながら動的に変化する環境、状況に対して、ある種の最適化を行っている。それで事故が起こっていないし、何も起こっていないように見える。

　だったら、それをやっている人は偉いんじゃないんですか。それをやっている人は単にマニュアルに従って◇……◇を果たしているだけですか。そんなことはあり得ないですね。マニュアル通りだけして、何も考えない人が現場にいたら、そんな現場は遅かれ早かれ事故を起こすはずでしょう。だったら、それをやっている人たちが偉いと。これはたぶんリーズンが言っている以上に、僕はこっちを強く感じたいですよ。

　ちなみに、その本の中に、佐相さんが訳された本の中に、信頼とは動的非事象であるという、深い洞察がリーズンの著書第13章にありますよね。原文は「Reliability is a dynamic non event.」という話です。non eventです。何も起こっていない。これが安全であり信頼性であると。

　ちなみに、これを語ったのはリーズンの本に引用している原典はカール・ワイクという組織マネジメント論の先覚者というか、リーダーの1人です。『Organizational sense making』という本が非常に有名です。やっぱりそれはセンスメーキング、いかにして仕事に意味を持たせるか、意義を共有するかというあたりに非常に注意を払っている研究者です。

　そして、こういう何も起こらないことが大事なわけ。事故を起こした後、素晴らしい動きをするヒーローももちろん大事です。でも、起こらないようにする動的非事象を維持させている、それを担っている紛れもない無名の戦士たちというのはとても大事なんじゃないでしょうか。そこに目を向けた研究は残念が私はあまり知らないです。

　ジェームズ・リーズンは、繰り返しますが、事故やエラーに目を向けるだけでなく、人間の素晴らしさやヒーロー、すなわちポジティブな側面に目を向けることをこの本で提案しています。とてもいい提案だと思います。だけど私はヒーローに加えて、無名の戦士にも目を向けることを提案したいと思います。

　人間心理を対象とする心理学研究も、ネガティブな側面に加えてポジティブな側面に目を向けることが望まれるし、そのような挑戦の1つとして、先ほどご説明いただいたセリグマンのポジティブ心理学を私は偏見を持って、そういうふうにポジティブに受け止めたいなというふうに思っています。

　実際にはこのような方向への研究活動というのは、そう思って見ればなされているし、実は我々もすでに着手しています。国際的に有名なのは、ここにあるカーレーン・ロバーツという人の「High Reliability Organization（高信頼性組織）」という研究、そしてそれを現場応用した一連の仕事があります。

　私の仕事の仲間である石橋キャプテンはご存じの通り、あれは空母の乗組員なんかがいかに素晴らしいパフォーマンスを果てしているかということを非常に大きな研究対象にしていますけど、空母なんていうのは安全性からいったら、やっちゃいけないことばっかりやっているわけですね。だいたい航空母艦って、どう考えても危ないですよ。でも、素晴らしいパフォーマンスを維持している空母組織がずっとある。

　それに触発されて私たちのグループでも「High Reliability Organization」実現のためのオペレーター支援方策に関する研究なんていうものも、すでに着手しております。それからたぶんいくつかの企業では、いわゆる良好事例の報告システムも試みられ始めているんじゃないかと思います。こういった方向が、ですから片方だけじゃいけないんです。ポジティブとネガティブと両方必ず相関的に実施現場導入に当たってはなされなきゃいけない。

　一方で、研究というのはある観点から徹底的にやらなきゃいけない部分があるので、ある研究はポジティブだけに絞り、ある研究はネガティブだけに絞ってなされていいし、私はそれを全然否定したいと思いません。結構です。ただ大事なのは現場に応用するときに、つまみ食いしちゃいけないということじゃないかなと思います。

　ちなみに、さっきのサッカーのコーチの例は、私が子供のサッカーチームの世話をしたとき、いろいろなコーチがああいうことを言うんですよ。ほら、またトラップミスした、ちゃんとボールをここで止めろよとか、あいつに抜かれるなよなんて、そんなことをできるなら苦労はないですね。それは全然コーチとして落第コーチです。出来のいいコーチはやっぱりもう少し肝心要のことを1つか2つだけ言うということを繰り返しているように思います。

　だから、心理学研究あるいは人間安全工学研究はいろいろな面からなされていい。でもそれを現場に導入するときに、必ずそのバランスを考えて、サッカーチームAのコーチみたいなことだけ言っているような現場応用にはぜひならないようにしたらいいんじゃないかなと思います。

　ここら辺を含めて、先ほどマニュアルについての問題提起もあったので、そこら辺について、この後もぜひいろいろな意見交換ができればいいと思います。ということで、意見の交換の入り口をちょっとだけ、道を付けさせていただきました。どうぞ、これから先、討論に入りたいと思います。電気をつけてくれますか。

＜録音終了＞